

| お 名 前 | 性 別 | 終戦時の年齢 | 現 住 所 |
|------------------|-----|--------|--------|
| 加藤 恭子 (旧姓 植村) | 女 性 | 1 6 歳 | 千葉県野田市 |

「戦後70年にして初めて知った級友の悲劇」

私たち新城高等女学校32回生は、法要の折に集まってはいましたが、50回忌が終わるまで楽しいクラス会は一度も開きませんでした。亡くなった同級生を追悼するのが第一ですから、それが自然の成り行きだったように思います。同級会を開いた時でも、豊川海軍工廠の話はほとんどしてきませんでした。誰も悲惨な体験は思い出したくないですし、亡くなった友を思い出すと悲しくなるからです。こうして生き残って幸せに生きていることに、申し訳なさも感じてしまうのです。

ですから、戦後70年の今年、新城高女32回生の70年前の悲劇を掘り起こして展示会を開いてくださったことによって、その現実を初めて知ることができたのです。野沢やすさんの記事（富岡ふるさと会館HP：続戦争体験 NO.10）もその一つです。その凄惨な状況を知り、驚き、繰り返し読んで泣きました。亡くなった方々の様子を初めて知り、長い年月を経た今、改めて女学校時代のクラス写真を眺めながら、深い思いの中で自分と向き合っ、薄れた記憶を少しでも手繰り寄せてみたいと思います。

○ 学徒動員で工廠へ

私たち新城高等女学校4年生（32回生）は、昭和19年4月から豊川海軍工廠へ動員されました。しかし私は、昭和20年1月から7.8人のクラスメートと共に師範学校で教育を受けるため海軍工廠を退き、新城高女に在籍のまま岡崎の師範学校へ通っておりました。当時の電車は運休、遅延になることは常で、そのためか電車はいつも身動きができないほど混雑を極め、呼吸困難におちいることもしばしばあったことを思い出します。

その頃は戦況が悪化し、男の先生方が出征されて教員不足になっておりました。その影響のためか、私は20年の4月には、私は富岡国民学校に奉職しており、新城高女の同級生は専攻科に進み引き続き豊川海軍工廠へ動員されておりました。

8月7日、海軍工廠が爆撃された時、



新城高女の木造校舎(現新城中)

私は5, 6年生の児童と共に校庭にいました。銀色に光るB29の編隊が飛び去って行くのが見えましたが、工廠が空襲されたことは分かりませんでした。

夜になって工廠の惨状が伝わってきました。その時の衝撃は、とても言葉で表すことはできません。一番最初に中宇利の級友、野沢やすさんの弟（元治）さんが亡くなったことを知りました。さらに、親友だった伊藤幸子さんはじめ大勢のクラスメートが亡くなったことが次第に分かってきました。私は、亡くなった荒川和寿子さんと同じ会計部機銃工事費係に属しておりましたので、当日工廠に居りましたならば同じ運命をたどっていたことでしょう。伊藤ふじ子さんも城所一子さんも同じ職場でした。

1週間も経たないうちに敗戦になったのですから、何とも言葉がありません。この季節が巡ってくると、あの痛ましい戦争によって若い命を奪われた友だちの少女のままの面影がよみがえってきて深い思いに沈みます。

「戦争は絶対にダメ！！」と心の底から叫びたいです。

○ クラスメートの思い出

【荒川和寿子さんのこと】

海軍工廠では会計部機銃工事費係に所属しており、寮に入っておりました。爆死された荒川和寿子さんとは同室でした。仕事を終えて寮に帰り、夕食後のひとときを（夕食前だったかもしれませんが）部屋の窓辺に腰掛けて歌っておりました。彼女の話し声は少しハスキーでしたが歌声はきれいで、グリーグ作曲のペールギュント組曲のソルベグの歌を黄昏の風景の中で、窓辺に腰掛けてゆっくりしたテンポで、その哀愁を帯びたメロディーを美しく歌っていた姿を鮮明に覚えています。その時の印象は深く心に残って、いつまで経っても忘れることはできません。まだ、爆撃されない時期でしたが、彼女がどんな想いでこの歌を口ずさんでいたのでしょうかと思ったりしますが、もう会うことも聞くこともできず、何とも悲しい思い出となりました。

【伊藤幸子さんのこと】

伊藤幸子さんとは、とても親しくしていました。幸子さんのお母さんから聞いた話です。8月7日は新しい洋服や靴で楽しそうに、にこにこして出かけていったとのことでした。

幸子さんが亡くなったと聞いた私はお宅へ二人の友達といっしょに駆けつけました。私たちはただ、ワーワー泣くばかりでしたが、お母さんは静か



会計部配属の新城高女生徒 写真提供:佐藤道洋氏

に幸子さんの遺影に向かって、「幸っちゃん！ 恭子さんたちお友達が来てくださったよ。私もお友達のみみんなもすぐに後から行きますからね。」と自分に言い聞かせるようにおっしゃって、「幸子は、右肩をやられたのでしょうか。雑のうの肩のところが切れていたそうです。」はっきりおっしゃいました。そのことのみ鮮明に覚えております。

○ 富岡国民学校のこと

私の短い教員時代のことをふり返りますと、若い未熟な私は、“**教生**”期間もなく初等科訓導という肩書きは重く、現場に立つ日々は緊張の日々だったように思います。

当時は、教育方針が根底から覆されて、教科書の中味は黒く塗りつぶされて、混乱の中でカリキュラムをどのように書けばよいのか悩んでいた自分を思い出します。

戦地から復員してみえたばかりの先生も次々と増えていき、職員室の空気が少し変わったように思いました。安形金末先生（体験記録 NO.51 参照）、伊藤正次先生、山田正照先生、それに洞雲寺の稲葉忠雄先生です。軍隊生活を過ごされたばかりの先生方ですから、ぴりっとしたというか、とげとげしいような緊張感のある雰囲気になりました。でも、先生方はずいぶん戸惑われたことと思います。それまでの教育方針を否定し、民主教育に取り組むのですから。その当時、先生方のお考えを聞いたわけではありませんが、方針を変えるためには大変な葛藤があったと思います。ご自身が子どもたちに教えてきたことが間違いだったと認めることが前提になるわけですから、戦前から先生方が苦悩されていたことはよく分かりました。

そんな職員室の中で、中西十三（教頭）先生の言葉が今も心に残っております。当時中西先生は、少し横道に逸れる恐れのある生徒の



昭和18年頃の富岡国民学校 高学年の模型飛行機づくり

息子さん（13歳）の死を伏せて（体験記録 NO.47 参照）

私は、戦後70年目にして初めて知りました。当時の中西十三教頭先生の13歳の息子さんが豊橋二中から工場へ動員され、爆死されたことを。空襲のあった夜、息子さんを探しに工場へ行かれたこと、そして遺骨もなく葬られたことです。

そんな大変なことがあったのに、職員室では何もお話しになりませんでした。大切な息子さんを亡くされた中西先生の悲しみはあまりにも深く、耐え難く、“誰にも話したくない”そんな気持ちで黙しておられたのかもしれないと、お察しするばかりですが、私はお悔やみを申し上げられなかった、そのことへの心残りとお詫言を強く感じております。

話をしている、「〇〇は導き方によっては優れた者になる。」とおっしゃいました。「導き方」、それは子供を見る目、包容力、指導力の大切さを教えていただいたものと胸に刻みました。また私自身に置き換え、導き、育てていただきたいことばかりだと感じました。

昭和20年は、まだ正規の担任ではなく5・6年生の担任の先生の補助をしており、先生に指示されたように動いていました。しかし、昭和21年の4月からは1年生を担当することになりました。1年生の担任は、私の子供の頃はベテランの先生が担任されていました。それなのに、まだ17歳の未熟な私が1年生を受け持つことになったのです。

入学したばかりの生徒の中に（富岡西部地区大原の子供でした）、いつも唇が紫色をした子がいました。気にかかって尋ねてみようと思っていた矢先、橋本校長先生に呼ばれて、「その子供を登校させないように、学校で何かあったら困る。」と強く指示され、親御さんにその旨を伝えなさいと言われました。「授業が受けられないとは??」とかわいそうに思いました。でも、校長先生の指示には従わざるを得ません。その子はチアノーゼという病気で、先天的に心臓に疾患のある重い病気だったのだと思います。今の時代では考えられませんが、当時は学校でもしものことがあってはいけないと、校長先生が心配されての措置だったと思います。私は家庭訪問をして、そのことを伝えましたが、お母さんは何もおっしゃらず、黙って受け入れてくださいました。

昭和22年4月からは6・3制が開始され、校名も富岡小学校となりました。私は富岡に3年ほど勤めましたが、昭和23年10月に結婚のため退職しました。でも、「学校に来ないでください。」と伝えたこと、その子のその後の様子なども気になって、時々思い出したりもしました。

こんな頼りない教師でしたけれど、私にとっては本当に純真無垢な子どもたちと過ごした3年の月日は宝物です。戦争が終わって間もない時代に、子どもたちが裸足やわら草履で写っている姿を見ては胸を熱くしております。



昭和21年入学式写真 裸足、わら草履の子が多い。左端に植村恭子先生